

R18

紫の薔薇の花嫁
(承ジョセ)

【目次】

紫の薔薇の花嫁	5	囚われの花嫁	42
セピア色の亡霊	30	花のようなキミ	48
運命への報酬	33	甘い狂宴	49
カウントダウン	38	密かな誓い	53
		ハッピーエンドはあつたかい	56

プロローグ

それはちょうど春の訪れを、感覚だけでなく目で肌で、感じられるようになってきた季節のことだった。

市が予算をつかって管理しているという、公道に並べて埋められた寒紅梅の木が満開で。

鮮やかなピンク色が溢れるその小道を、ジョセフはその日、ご機嫌に歩いていた。

機嫌の良い理由は、透き通るような青空に輝く梅の花がひと際見ごろだったというだけではなかった。ジョセフの後ろを「やれやれ」というようにのんびりと——しかしつかず離れずの距離でつきあって歩く孫の承太郎が、その日通っていた高等学校を卒業し、ひとつ大人への階段を上ったことが、わかっていたからだ。

自慢の孫の成長が、嬉しくないはずもない。

おまけにその前途を祝福しているかのように、その日は宇宙まで見通せそうなほど、見事に澄み切った青空だったのだ。

そのせいか、そのときのジョセフは、いつもの数倍浮かっていた。

だからかもしれない——承太郎の様子がいつもと少しばかり違っていったのに、気がつかなかったのは。

ジョセフが、並木の中でもひとときわ見事な大木の前に立ち止まって見惚れていると、不意に影が差した。

承太郎がいつの間にか、自分のすぐ後ろに立っていたと気が付いたのは、一瞬後だった。

「…承太郎？」

振り向いて名を呼んだのは、彼との距離がなんだか『近すぎる』気がしたためだ。

スキンシップ過剰気味なジョセフではあるが、それでもそれが人と人である以上——どんなに親しい相手とでも、共に立つときに一定の距離は置くのが普通だ。

その距離がいつもより『近い』ような、妙な違和感を覚えたのだ。

承太郎はジョセフの呼びかけに応えなかったが、その時突然強い風が吹き上げ、ジョセフは思わず目をかばって、顔の前に手をかざした。

だからかもしれない。

承太郎がどんな表情でそれを言ったのかは、ジョセフには今でもわからない。
ただ、それは静かな声だったが、確かに音となってジョセフに届いたのだ。

——「好きだ」と。

紫の薔薇の花嫁

その日も、抜けるような青空だった。

太陽の光を反射してキラキラ輝く若葉の並木道を、車で数十分ほど走り続けると、開けた丘が現れ、真っ白な建物が見えてくる。

「随分変わったけど…やっぱり懐かしいわ」

珍しくも車の窓を開けて、景色を眺めていたスージーQが、そうつぶやいた。

それは静かで穏やかな口調に一見思えるだろうが、長年連れ添ったジョセフには、スージーQの声がわずかにはずんでいることがわかる。

「ああ、そうじゃな」

ジョセフは微笑んで、徐々に大きくなってくる建物をバックに、広がっている青空に目をやった。

まるで「今日」という日を天が祝福しているようだと思うのは、あながちジョセフの欲目のせいばかりとは言えないだろう。

その日、イタリアの片田舎にぼつんと立つその教会に、ジョセフがスージーQと共に訪れたのは、孫の承太郎の結婚式に出席するためだった。

一昨年、アメリカの大学に進学していた承太郎は、しばらくして同じ学科の女性と交際を始め、一年と満たないうちに結婚を決めた。

式場となるのはかつてジョセフが妻のスージーQと共に式をあげた、イタリアの片田舎にある小さな教会だった。承太郎の母ホリイによれば、それは承太郎のたつての希望だったという。

「パパとママはいつまで経っても仲良しさんだから…承太郎もきつと、彼女とそんな夫婦になりたいのよ」

ホリイはそんなことを言っていたが、自分の孫が人一倍リアリストであると知っているジョセフは、承太郎がそんな験を担ぐような真似をしたがるとは思えなかった。

けれど、忘れられない「あの旅」を通して、承太郎は自分の言葉や態度が他人と比べて何かと足りないことを、改めて自覚したようだった。

だからスージーQと長く円満な家庭を築いているジョセフと同じ場所で式をあげることで、妻となる女性に対して